

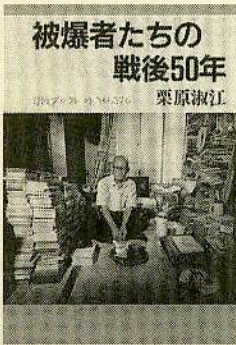
書

評

## 『被爆者たちの戦後50年』 岩波ブックレットNo.376

栗原淑江著 岩波書店 定価400円 63頁

平石 共子 (第一経理・税理士)



「『被爆者でもないのに、なぜ』と聞かれることもある」という著者の栗原淑江さんと被爆者との出会いは27年前にさかのぼる。大学のゼミで被爆者の「生活史調査」に参加

したのが始まりで、その後も調査をつうじてたくさんの被爆者と出会う。1980年から11年間は日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の事務局員として調査や運動を支えてきた。さらに3年前から被爆者たちに「自分史」を書くことを提唱し、運動の推進力となっている。

本著は被爆者と深くかかわってきた著者の手により、被爆者のことばをとおして原爆被害の何たるか、被爆者がこの50年をどう生きてきたのか、被爆者たちがなぜ「自分史」を書こうとしているのかが、63頁という小冊子のなかにみごとに凝縮されている。

私たちはこの小冊子の中でたくさんの被爆者と出会うことができる。被爆者の生のことばは原爆のむごさ、恐ろしさを私たちの胸に深くきざみこんでくれるのである。

1章「被爆者たちの現在—今もつづく原爆とのたたかい」の冒頭は、49年目に乳ガンの宣告を受けた堂尾さん（65歳）のはなしで始まる。

《被爆者はガンになる確率が高い、とたびたび耳にしていたので、不安を抱きつつ50年の歳月を過ごして来たが、やっぱり、来た！》

原爆後障害とは、直接的な原爆死を免れた人たちにその後現れたさまざまな障害をいう。被爆5年後くらいから徐々にガンが増え出し、現在も増加傾向にあるという。原爆症、特にガンの不安は生きている限りつづく。

2章「生きてきた50年」の5人の被爆者のそれぞれの50年は重く、胸に迫りくる。「4歳8ヶ月で被爆して、もの心ついてから、ただ“被爆者、としての人生”だったという小峰さん。体半分の火傷によるケロイドで幼い頃から「差別」「偏見」「いじめ」にさらされ、被爆者ゆえに就職も結婚もままならない。被爆者たちの50年をたどっていくと原爆への憤りが自ずと湧いてくる。

3章「『自分史』を書く被爆者たち」では栗原さんの呼びかけに応え、「自分史」を書こうとしている被爆者たちの思いの丈が伝わってくる。

「書き残しておかねばならない」という気持ちと「一番つらかったことは書けない」という気持ちの狭間で揺れ動き、その葛藤をのりこえて書きはじめている被爆者たち。自分史には被爆前の「そこに息づく人間どうしのつながりや温もりにみちた暮らしが、詳細に描かれれば描かれるほど、それを一瞬に破壊した〈原爆〉のむごさが衝撃」となって浮かび上がってくるのだ。ここで被爆体験でなく、なぜ「自分史」なのかという意味が明らかになってくる。

そして被爆者たちは〈人生を総括〉するとき、自分の人生をねじ曲げた〈原爆〉を否定し、それをもたらした〈国の戦争責任〉を問う。それが「生かされた意味」であり、「本当の被爆者の生き方」であるという思いの証でもある。

被爆者たちの高齢化がすすむ今、「自分史」運動の重要性はますます高まっている。この労作が戦後50年のこの年に発刊されたことはその大きな推進の力となるに違いない。

唯一の被爆国に生をうけた私たちは、被爆者の思いをしっかりと受けとめていきたいと思う。一人でも多くの人に読まれ、読み継がれ、語り継がれることを願ってやまない。